

●地元産木材のぬくもり感じる 園舎がしゅん工



▲完成した三郷東部認定こども園
▲施工者に向けた園児からのメッセージ

三郷東部認定こども園の新園舎が完成し、7月30日に地元関係者や工事関係者ら約60人が集まりしゅん工式が行われました。式典出席者には旧園舎で長年子どもたちを見守ってきた桜のせん定枝で作った記念マグネットが配布され、年長児によるビデオメッセージと歌が披露されました。太田市長は新園舎の性能や内装にこだわった点を紹介し、「多様化する保育ニーズに応え、地域に愛される園となることを願う」とあいさつ。丸山硝子株式会社代表取締役の丸山隆則さんは、今回の工事に

携われたことを喜びながら「近隣住民をはじめ多くの関係者の皆さんの協力のおかげで無事故でしゅん工できた。この園で多くを学び卒園し、末永く愛される園になってほしい」と、施工者を代表してあいさつしました。

旧園舎は昭和53年に開園してから47年が経過し、老朽化などから移転新築しました。令和4年度から用地の確保に向けた協議を開始。令和5年度に工事に着手し、本年5月に園舎が完成しました。これにより、市立全19園の耐震化が完了しました。また、園庭の芝

生化等の園庭整備工事も行い、8月18日から新園舎で保育が始まりました。

新園舎は、床面積1725平方メートルの鉄骨造平屋建て。新たに0歳児と1歳児の部屋を1部屋ごと確保し、延長保育専用室も新設しました。内装には堀金地域で伐採したアカマツ材をふんだんに活用し、ぬくもりを感じられる空間となっています。旧園舎は令和8年3月末までに解体を行う予定で、用地取得や園舎建設を含む総事業費は合併特例債などを活用し約16億6419万円を見込んでいます。

●はだしでフカフカ芝生を駆ける 堀金認定こども園芝生使い始め式

市では全ての市立認定こども園と幼稚園の園庭の芝生化を昨年度から進めています。このほど県内最大規模の園庭を誇る堀金認定こども園の芝生化が完了し、芝生園庭使い始め式が7月24日に行われました。太田市長は園児たちに向けて「フカフカの芝生だと転んでも痛くない。元気いっぱい遊んで大きくなってください」とあいさつ。式

典後には、園児や保護者ら約150人が「せーの」の掛け声とともに裸足で一斉に芝生化した園庭に駆け出し、寝転んだり手で触ったりしながら芝生の感触を確かめていました。

年長児の矢澤大吉くんは「芝生はモサモサしていて気持ちがいい。友だちとたくさん追いかけてやりたい」とうれしそうに話していました。

使用している芝はケンタッキーブルーグラスという品種で、耐寒性や耐踏圧性に優れています。本年4月22日に園児らが約2850平方メートルの園庭に種をまき、約3カ月の生育期間を経て青々とした芝生園庭となりました。



一斉に芝生化した園庭に駆け出す園児たち

●安心して避難できる体制を 宿泊施設と連携を強化

市と穂高ビューホテル株式会社は7月30日、「災害時等における宿泊施設の提供に関する協定」を結び、市役所で締結式を開きました。この協定により、高齢者や障がいのある人などの避難行動要支援者のうち、一般の避難所では生活が難しい人とその支援者が災害時の避難先として同ホテルの客室を利用できるようにします。

締結式で太田市長は「災害はいつ起こるかわからない。特に支援を必要とする皆さんは避難時に特別な配慮が必要になる。協力体制を築き、災害への備えを十分にしていきたい」とあいさつ。衛藤悦郎社長は「避難して来た皆さんにリラックスして過ごしていただけるよう、万全を尽くして業務に励みたい」と応じ、連携の強化を確認しました。

同ホテルから申し入れがあったこと



協定書を掲げる太田市長(左)と穂高ビューホテル株式会社衛藤社長(右)

で締結が実現した同協定は令和4年度から始まり、今回で締結者は8者となりました。市は居住地や障がいの程度、要介護度などの要件を満たす場合、宿泊費として一人一泊あたり5000円を補助します。

表敬訪問



小林あかりさん
(穂高)

6月に静岡県で開かれた第93回全日本自転車競技選手権大会ロード・レース女子エリート+女子U23で優勝した小林あかりさんが7月8日に市役所を訪れ、太田市長へ結果を報告しました。

小説『安曇野』を読もう！

第6回 第2部(その二三から二六) 荻原守衛(碌山)の死

帰国した守衛が発した「安曇野がれんげの花が埋まるころ、雪の消えて残った常念岳や鍋冠山(なべつかぶりやま)が、すぐうしろにひかえてさ、こんな美しいところは、どこにもないよ」は、小説『安曇野』の明文のひとつと評され、その一三に登場します。その一五では、守衛の歓迎会が穂高で開かれます。安曇節を舞う井口喜源治、「常盤樹」を吟じる手塚縫造など、守衛が多くの人たちから愛されている様子が伝わってきます。

また、守衛のアトリエが新宿に進出した「中村屋」の近くに完成。守衛は、そのアトリエを「オブリヴィオン(忘却庵)」と名付けます。守衛が忘却したい対象は何だったのでしょうか。

その二〇から二五までは、「文覚」「デスベア」「北條虎吉像」「労働者」そして「女」の制作に没頭する守衛がつづられています。



1936年に高村光太郎が詠んだ碌山美術館東庭にある「荻原守衛」の詩碑

そしてその二五「病人は無意識に両手をのばした。孤雁はつかまえて、かたく握りしめた。病人はごくんといきをしきたきり、そのまま呼吸がとまってしまった。」と守衛が息を引き取る場面が描かれています。こうして第一部を書き終えた後、病床にあった白井吉見が「命があるうちに、せめて碌山の死まで書きたい」と切望した第2部が終わります。

舞台が正時代へと進む第3部は、主な登場人物が次々と命を落とす激動の巻になります。